

帝国に属することとナショナリズム

戸谷 浩

「帝国（連邦）が解体したのは、ナショナリズムの勃興がその原因である。」

一般的な理解のみならず、学界や研究者・専門家の間でさえ、上記のテーゼに疑念を抱く人の数の方が圧倒的に少ないのが現状ではなからうか。昨年来のロシアによるウクライナ侵攻も、対立の淵源を辿ってゆけば、1991年12月のソ連邦の解体に行き着くという理解が大勢を成している。高じたウクライナ・ナショナリズムのゆえに、ウクライナはソ連邦を脱し、ロシアとも袂を分かったという、分かり易いと言え、分かり易い理解である。

ナショナリズムを、帝国や連邦の解体の主因と捉える考え方は、古くは19世紀のハプスブルク帝国やオスマン帝国を「民族の牢獄」と捉える主張に辿り着くと思われる。艱難辛苦を耐え忍んできた諸民族が、近代に入り、民族（国民）意識に目覚め始め、自身の言語・宗教・文化に対する自負を強め、政治的な諸権利や自治・独立を求め、立ち上がる——といった「ストーリー」である。現に、第一次世界大戦後には、ドイツ帝国、ハプスブルク帝国、ロシア帝国、オスマン帝国といった「牢獄」が一挙に解体し、多くの民族が自前の独立国家を獲得することに成功している。

ただし、近年、こうしたナショナリズムを帝国（連邦）の解体の主因としてのみ捉えようとする見解に対して、異を唱える見方が相次いで提起されている。「帝国の随伴者としてのナショナリスト組織」論と、「ネイションへの無関心（national indifference）」論がそれである。

前者は、煎じ詰めて言えば、帝国は各民族（ナショナリスト）を必要とし、同時に各民族は帝国を必要としたという事実を強調するものである。帝国は、例えば、国家の近代化を推進しようとする際に、各民族エリートの方に頼る必要があったし、諸地域を構成している主要民族に、現地・現場における近代化の推進役を依頼せざるを得ないという厳然たる事実が存在していた。他方、各民族にとっても、自らの言語での教育を学校内で実現しようとしたり、宗教実践を政府に認めさせたり、議会内で議席を確保し、民族の意見を国政に反映させるためには、政府や支配民族と、一面对立はしていても、最終的には歩調を合わせてゆく姿勢が求められていたのだとする考えが、「帝国の随伴者としてのナショナリスト組織」論である。

それに対して「ネイションへの無関心」論では、帝国や連邦に敵対的なナショナリズムという存在自体を「特殊なもの」、必ずしも普遍的な思想ではないという立場を取る。その証拠に、例えばハプスブルク帝国領においても、多民族の共生地域や国境地域といった、民族意識がより高まったり、民族紛争が激化してもおかしくないはずの地域ほど、そこに住む人々は、日常的には、民族を意識させるような言動を回避する傾向があることが報告されている。逆に、そ

ういった地域では、人々は「ネイション」に対して「無関心」を装うのである。

上述の2つの論に代表されるように、ナショナリズムが帝国と対立的で、帝国解体の原因に他ならないといった、かつてのような断定的で、固定的な理解は、現在では見直しを求められつつあるが、それでも、その両論においてさえ「ネイション」の差異・存在に関心が集中している点は、「民族の牢獄」論と大差はないようにも思われる。

そこで、フォーラムでの報告では、帝国を構成している各民族を細かく分け、詳細に分類していこうとする思潮とは異なる、あるがままの全体をそのまま捉えようとする思考の存在に注目してみた。19世紀後半から20世紀の初めにかけての時期には、この2つの異なる思潮を具現する形で、博物館なるものが創造され、建設されていった。それぞれの代表例として、報告ではウィーンの世界史博物館（1889年開館）とストックホルムのスカンセン野外博物館（1891年設立）に言及した。

両者の違いは、その展示の内容と形式を見れば明らかであろう。世界史博物館では、人は細かに分類され、収集された大量の展示物の総体としての全体、すなわち自身が属する「世界」を体感し、実感し、納得するのである。博物館自体が、帝国を再現・体現していると言うことができるかもしれない。

それに対しスカンセンは、スカンジナビア「世界」を体現し、表現していると言いながら、設置されている建築物は、いくつかの地域の代表的な建物にしか過ぎず、しかも本物（オリジナル）ではなく、現物の「コピー」でしかないものさえ含まれている。全体を体現していると言うには、甚だ「不十分な」部分の集積に過ぎないように思われるが、来館者に伝えたい「世界」像、すなわち全体は、それで十分に表現されている、把握されているというのが、設立に関与した人々の考え方であった。各地の建物を移築し、集積した時点で、その空間がどこでもない、どこにもない空間であることは、ある意味、明白であるが、その点が問題視されることはなかったのである。あるべき全体像が再現され、人々に伝えられることこそが肝要なのであった。

この同時代に設立された2つの博物館に流れる、2つの思想が、帝国や民族を捉える仕方にも反映されることはなかったのか。それが報告者の思索、今回の研究の出発点にある。そして、そのことを確かめるフィールドとして選んだのが、ハプスブルク帝国の一部でもあったイストリア半島であった。

イストリア半島は、多民族帝国と称されるハプスブルク帝国の中にあっても、引けを取らない多民族・多文化社会である。民族としてはイタリア人、スロヴェニア人、クロアチア人、ヴァーフなどが住み、都市部にはオーストリア人、ハンガリー人、ユダヤ人の居住者も多かった。歴史的には様々な国家の影響下にあり、ローマ、ビザンティン、ヴェネツィア、オーストリア由来の文化遺産を半島内の各所で見ることができる。半島の西の付け根に位置するトリエステは、歴史的にはオーストリアの港であり、対して、東の付け根にあるリエカはずっとハンガリーとの結び付きが深い港市であった。

従来はナショナリズムに拘泥する見方からすれば、イストリア半島はネイションが角突き合わせる角逐の場、一種の最前線と見なされてきた。イタリアと旧ユーゴスラヴィアに挟まれた地域でもあるイストリア半島と言えば、イタリアの領土要求運動であるイレデンタを思い起こ

す人も多いであろう。支配民族であったオーストリア人・ハンガリー人と、被支配民族であるスラヴ系の人々との対立も、恒常的に存在していた。20世紀に入ると、トリエステから多くのユダヤ人が脱出したり、追放されたりした。

ただ、その一方で、民族的な相違を超えた「イストリア人」としてのアイデンティティを重視し、イストリア半島というまとまりを全体として大切にしたいという思潮も、本流となることはなくとも、存在した。歴史的な背景も含め、イストリア半島に居住する（した）民族やその文化を、細かく分けて、分けて、降りていって探るのではなく、あるがままの半島社会を全体として受け取ろうとする姿勢が、そこには垣間見られた。

しかし、イストリア半島の一体性とハプスブルク帝国の全体性に、いかなる関係が存するのか？「イストリア人」としてのアイデンティティと言っても、その範囲、まとまりは誰が決めるのか？イストリア半島全体なのか、トリエステやリエカといった大都市も含むのか、コベル・ポレチュ・プーラ・パズィンなどの独立性の強い諸都市ごとに、帰属意識は異なるのではないかと等々、報告時にも質問を受けたし、疑問は尽きないであろう。

実際、ここから先は未だ考えがまとまり切れていない点が多い。だが、全く見通しがいいわけでもない。

上記のコベルやポレチュやプーラといった半島西側の沿岸部にある諸都市は、皆似通った地形をしている。突き出した岬に街が作られ、穏やかな湾や内海を抱く地形は、遠景だけだと、どれがどの都市なのか混同せずに言い当てることの方が難しい。また、トリエステがつなぐオーストリアがあり、リエカがつなぐハンガリーがあり、イタリア系とスラヴ系の住民がひしめく社会を、そのままハプスブルク帝国の縮図と見なすことは突飛な思考であろうか。ある部分は、見方によれば全体にもなり、その全体は同時にある全体の一部も成している。それぞれが相似形を成していることは、そうした部分と全体の関係をより強く後押しする。フラクタルの発想である。

多様性を前提とした社会や地域を当たり前の「全体」と見なし、生活してきた人々は、ある岬の先の街を受け入れる際にも、イストリア半島を考える際にも、自身が属すると強調されるハプスブルク帝国の臣民であることを自覚する時も、相対立する側面の強い、個別のネイションを意識すること以上に、多様であっても眼前に存在する世界全体を、そのまま受け取ろうとするのではなかろうか。なぜなら、その彼・彼女は、生まれてからずっとそうしてきたし、どの範囲の領域を考える際にもそうしてきたからである。

岬は半島に、半島は帝国自体に似ていると実感できたことが、2022年夏に行なった調査旅行の最大の成果であった。コロナ禍で3年以上もヨーロッパの地に赴けなかったことが逆に幸いし、ナショナリズムを当然の出発点とするそれまでの発想とは全く別の視角に、気付くことができた。ただし、実証の部分は全く手つかずであり、今後、鋭意取り組んでゆきたいと考えている。

〈参考文献〉

- Pieter M. Judson, *The Habsburg Empire: A New History*, The Belknap Press of Harvard University Press, 2016
- Tara Zahra, *Kidnapped Souls: National Indifference and the Battle for Children in the Bohemian Lands, 1900-1948*, Cornell University Press, 2008
- 松宮秀治『ミュージアムの思想』白水社, 2009年(新装版, 初版は2003年)
- 落合知子『普及版 野外博物館の研究』雄山閣, 2019年
- M・ストラザーン(大杉高司ほか訳)『部分的つながり』水声社, 2015年
- J・グリック(上田暁亮監訳, 大貫昌子訳)『カオス—新しい科学をつくる』新潮文庫, 1991年
- B・マンデルブロ(広中平祐監訳)『フラクタル幾何学』ちくま学芸文庫, 2011年